

## 「地域へはばたく看護教育」

奈良県医師会看護専門学校 教員一同

本校が位置する奈良県橿原市は、日本最初の本格的都城の藤原京跡、江戸時代の面影を残す今井町、橿原神宮など神話と伝説が交差する神社仏閣がある。令和4年現在で創立67年を迎え、卒業生は4000人を超える名実ともに歴史ある学校（1学年40名3年課程）である。

今回の新カリキュラム編成は3年前から準備を進めてきた。科目名こそ、旧カリキュラムと同じ名前の科目はあるものの、新カリキュラムにおいて同じ内容の科目は1つもない。125回の教員会議や勉強会を経て意見交換し、時に多忙な職務の間に行われる会議においては陰湿な雰囲気となりつつ、私たちが「育てたい学生像」をかたちとしたこの新カリキュラムには、全教員の看護教育と学生への熱い想いが込められていると自負している。

まず、カリキュラム編成においては目標分析法によりスコープ&シーケンスを行い、教育内容を抽出した。1年次に学ぶ基礎分野においては、年々、生活体験が乏しい世代の学生が多く入学してくるという傾向から、食・住の生活文化に関心を持ち、また専門職業人として、社会人として人生をどのように生きるかを育成するため、「生活科学」と「キャリア学習」の2科目を新設した。この科目については地域・在宅看護論と対象を生活者にとらえるねらいもリンクさせた。教授方法は演習や体験学習がほとんどであり、卒業生の講話、宿泊研修、茶道、着付け、地域活動、ティベート、調理、洗濯やアイロン、掃除の方法まで様々な指導内容を取り入れた。

専門基礎分野においては臨床判断方法論と治療と臨床検査の2つを新設した。これは解剖生理学や病態生理学、臨床薬理学の知識を活用し、看護として実践するための臨床判断能力の向上を目指し、演習を中心とした科目とした。さらに、病態生理学は主として外部講師（医師）に依頼しているが、最後の講義は教員が受け持ち、解剖を看護へつなげる内容の講義を設定した。

専門分野においては地域・在宅看護論Ⅰ～Ⅴを新設した。地域・在宅看護論（以下 地・在論と略す）Ⅰ＜奈良の暮らし＞では、奈良の地域特性を知り、地域が人に与える影響について、フィールドワークを通して学習する。加えて地域を知る一環として市長による授業も予定している。地・在論Ⅱ＜奈良の保健医療福祉＞では、現場で活躍する専門職が、事業や職務の実際についてオムニバスで講義を行う。この科目は奈良県医師会員の「奈良県医師会の活動」の講義から始まり、行政職員による「地域連携化の役割」等、学生が苦手とする福祉の分野をより身近にわかりやすく学習できるよう工夫した。地・在論Ⅲ＜ケアマネジメントと多職種連携＞では、居宅介護支援計画書を学生が作成するといった演習や、IPEを目的とした歯科衛生士看護専門学校と、協働演習を行う予定である。地・在論Ⅳ＜地域・在宅看護技術＞では、日常生活における援助の方法について学ぶ内容とし、地・在論Ⅴ＜看護過程と地域・在宅看護の実際＞では、地域で展開する看護の実際について、それぞれの専門職がオムニバスに講義を行う。講師は施設の看護師、小児、精神、高齢者、母子に精通した訪問看護師や保健師による看護の実際や、地域で展開される認知症対策など、全領域にわたる様々な健康レベルや発達課題を網羅した教育内容とした。

講義と平行し、地域包括ケアシステムの中で活躍できる看護師の育成を目指し、まず地域の暮らしや人々を知る目的で、1年次からこども園や福祉センターでの地・在論実習Ⅰを組んだ。さらに地・在論実習Ⅰのすぐあとに、基礎看護学実習①を予定しており、「病院を知る」といったねらいをとリンクさせた。3年次において地・在論実習Ⅱでは、健康の保持増進・疾病の予防について学ぶ実習と位置づけ、保健センター、小学校での実習、産業・成人保健を学ぶための健診センター実習、障害があってもその人らしい健康を守る視点を育てるため障がい者施設での実習を取り入れた。地・在論実習Ⅲでは、地域で療養している対象の看護について学ぶために、訪問看護ステーションや高齢者施設実習、外来看護を意識し、クリニック外来実習を新たに追加した。実際に看護過程の展開ができる実習は訪問看護ステーション実習だけで、あとは2日ずつのオムニバス実習であるが、体験を重視し、レポートを中心としたルーブリックで評価する。

しかし、地・在論実習においては、小学校やクリニック、健診センターなど、新たに追加した実習場所が多々あり、2年にわたり行政をはじめとし、あらゆる関係各所へ幾度となく協力を依頼した。特に健康の保持増進に関係する行政がからむ実習場所の壁は険しく、地域包括ケアシステムの構築を急務とする国の指針や新カリキュラムのガイドラインと、現場の対応の乖離に幾度となく心が折れた。多様な場所で短期間の実習といった形式が初めてであり、これが円滑に実施できるか不安も大きい、「学生のために」を合言葉に、粘り強く交渉した日々が無駄にならないよう準備していききたい。



今井まちなみ交流センター「華葦」